

本例は、腰背痛と寒熱を病む女性である。衆医皆寒熱と
なす。倉公は内寒（生殖器の冷え）で月事下らず、と診断
して座薬を用いて治癒せしめた。

寒熱に二つの場合があることは先に述べたごとくであ
る。患者の寒熱は神経性の冷えとのぼせである。衆医の寒
熱は感染性の弛張熱である。倉公は脈を診して、腎脈が洪
って属せざるより月事下らざるを知り、肝脈が弦にして左
口に出ずることより、男子を欲して得ざりしことを知る。
腎肝ともに生殖器に関係するが、肝は外陰に、腎は内陰に
関係が深いように考える。

感染症としての寒熱は重症の病である。衆医がよく他病
を誤診して寒熱としているが、それだけ関心が強かったか
らだと思う。

（神奈川県横浜市）

『傷寒論文字攷続補』について

荒木 ひろし

『傷寒論文字攷続補』は『傷寒論文字攷』（嘉永四年刊）
と『続編』（嘉永六年刊）を著わした伊藤鳳山が、続編に
書きもらした項目を増補した未刊の稿本で、従来は稀覯本
であった。しかし一九八六年六月に右の三編を収録し、湯
浅幸孫氏の解題、戸川芳郎氏のあとがきを附した影印本が
汲古書院から出版されたのでようやく入手し易くなった。
ところが続補には杏雨書屋に蔵されていた異本がある。
筆者は湯浅本が出版される以前に杏雨本の複写を入手して
いたが、あらためて両者を比較すると、項目の選定とその数
に異同があり、書写体や体裁にも明らかな異なりがある。本
稿ではその異同を明らかにし、その執筆時期を検討する。

一

湯浅氏によると続補は「おそらく未定稿であったらう」と

いう。この推測が正しいことは杏雨本との比較によりはじめて証される。すなわち湯浅本が五十二則を記載した一巻本で同一人の書写であるのに対して、杏雨本は七十四則・上下二巻本となっており、複人数の書写から成るからである。しかも両者の異同は字句にとどまらず、解説も杏雨本の方がより詳細である。

たとえば冒頭におかれた「傷寒卒病論集」の項をみると、杏雨本では『難経』五十八難を引用した記述を文頭におき、後半に湯浅本と重複した記述をのこしている。また湯浅本で「小柴胡湯」に相当するものを杏雨本から拾うと「小柴胡湯麻黄湯」とある。その記述は前半を湯浅本と共通の「小柴胡湯、通津剂」説で説き、後半ではあらたに桂枝湯・葛根湯・麻黄湯の類別を述べて、麻黄を「营血中の陽気を発する」治剂とする論を展開する。

続補にとりあげている項目を検討した結果は、両書に同一のものが三十六則、標題を変更したり明らかに加筆しているものが十三則、湯浅本にのみ見られるものが三則、杏雨本にのみ見られるものが二十二則であった。

以上のことから続補の成り立ちは、まず湯浅本が鳳山の

手稿本として成り、次いで、門弟子が加わって杏雨本を作成して公刊を期した。その一方で、湯浅本にのみ見られる「八十一難」の項は、他の著述へと移され、『難経文字攷』（八十一則より成る手稿本）として結実したといつてよい。しかしこの両著は定稿に近いにもかかわらずなぜ公刊に至らなかった。

二

ところで、続補の著述時期は不明であるが、安政三年（一八五六）から翌四年の前半の頃であると推測される。当時の鳳山は江戸四ツ谷に開塾して書を講じていたが、楓山秘府の趙開美翻刻・宋本傷寒論を知る機会をえた。多紀元堅の序を得て堀川済がその影刻本を公にしたからである。

堀川氏は「其字画端正、頗在宋板体貌、蓋傷寒論莫善於此本」（『経籍訪古志』）と評される楓山本を忠実に影刻して最善のテキストを示したのである。続補に引かれる宋本がこの堀川本を指している可能性はきわめて高い。すなわち「便字義」条下と「流留通用」（杏雨本では流読為留とある）条下に見える「宋本」の語がそれである。鳳山は従来

の成本と宋本（一に宋版に作る）との文字を対校して訓みと意味を明らかにしようとする。便字を宋本が假字に作り、成本が便字に作ることを論じて「此似兩通」としながら「成本作便頗意趣」と評し、便字を安と訓じ「安然として忍慮を用いざるの意。殆んど世医の情態を尽くせり」とする。一方、弁脈法に見える「榮氣微者、加焼針、則血流不行」の句については、宋本が「流」字を「留」字に作ることを示し、「古人流留互通、宋本作留者正字也。成本作流者假借也」として、その論証を『周易』繫辭伝・『釈文』・『詩経』旃丘篇・『莊子』天地篇・『素問』八正神明論次註に求める。以上は湯浅氏の解題を参考してじゃっかん補足したにすぎない。

右には湯浅本に基づく視点を示したが、杏雨本はどうか。これも前者と近い頃に作成されたとみなしてよい。あるいは鳳山が甲信越・酒田等を周遊して江戸四谷に戻った頃（文久年間・一八六一〜六三）である可能性もある。しかし湯浅本と『難経文字攷』の書写体の類似、杏雨本から『難経』への展開を考慮すると、安政年間に続補ならびに『難経文字攷』が作成された可能性は高いと考えられる。

三

幕末の動乱の中に生き、各地を転々としながら鳳山は明治三年三河田原に没した。その生涯は儒医というにふさわしく、群弟子から「私かに明経先生と諡され」た（渡辺小華・華山の第二子の墓碑銘による）。その主な医著述は本稿で挙げた他に『扁鵲伝問難』、『扁倉伝割解彙攷刊誤補遺』、『類聚方序故事解』、『傷寒論口授筆記』、『漢蘭酒話』等がある。

（荒木正道遺徳会代表）